群馬大学社会情報学部研究論集　第11巻　129—143頁　2004

コールリッジの語ったこと
——『文学評伝』(1817)——

小　林　　徹
外国文化研究室

What Coleridge Talked :
The *Biographia Literaria* (1817)

Toru KOBAYASHI
World Civilizations

Abstract

It would be true that talking critically of Coleridge's *Biographia Literaria* is almost equivalent to saying something about the relationships between the author and Wordsworth. It is also correct in thinking that the work is a kind of counterstatement to Wordsworth's writings. But these interpretations, which have been provided by many critics, are not enough to develop a comprehensive understanding. The *Biographia* exists based on Coleridge's multiple relations to the contemporary literary situation, himself, Wordsworth, and "oral cultures." Of those, the relationship between Coleridge and Wordsworth is central, but interrelationship of those four is more important because they cooperate to determine both the content and mode of the work.

Through the analysis of these relations, especially those with Coleridge himself and "oral cultures," the *Biographia* appears to be different from a simple autobiography which concerns the public figure of the author or an earnest defense against censures from the literary circle. Considering its abundant characteristics stemming from "oral cultures" and the importance of Wordsworth as a counterpart of the author in the work, it presents itself as an autobiographical open letter to the poet. There Coleridge "talked" about himself to compete with Wordsworth, in the public field, as a philosophical literary critic. More importantly, then, this feature is where the work's significant originality derives from. The *Biographia* is not only an anti-Romantic

autobiography, but also realizes an entirely new mode of the genre which represents a "private" figure of the author depending on the real personal relationship between himself and Wordsworth.

I

Samuel Taylor Coleridge の *Biographia Literaria* (1817) の冒頭部分は、長く引用する価値がある。

> It has been my lot to have had my name introduced both in conversation, and in print, more frequently than I find it easy to explain, whether I consider the fewness, unimportance, and limited circulation of my writings, or the retirement and distance, in which I have lived, both from the literary and political world. Most often it has been connected with some charge, which I could not acknowledge, or some principle which I had never entertained. Nevertheless, had I had no other motive, or incitement, the reader would not have been troubled with this exculpation. What my additional purposes were, will be seen in the following pages. It will be found, that the least of what I have written concerns myself personally. I have used the narration chiefly for the purpose of giving a continuity to the work, in part for the sake of the miscellaneous reflections suggested to me by particular events, but still more as introductory to the statement of my principles in Politics, Religion, and Philosophy, and the application of the rules, deduced from philosophical principles, to poetry and criticism. But of the objects, which I proposed to myself, it was not the least important to effect, as far as possible, a settlement of the long continued controversy concerning the true nature of poetic diction: and at the same time to define with the utmost impartiality the real *poetic* character of the poet, by whose writings this controversy was first kindled, and has been since fuelled and fanned. (I : 5)

創作の動機が語られるこの部分が重要なのは、それが作品解釈のための手掛かりを与えるからだ。

そこには幾つかの関係性が埋め込まれている。いずれもコールリッジを一方の項とする関係性である。叙述の順序に従えば、語り手はまず、自分が度々世間で話題に上る、しかもしばしば「非難と結び付けられている」と述べているが、その発言にはコールリッジと当時のいわば文学的状況という関係性が読み取れる。次は彼と彼自身の関係性である。この書物の叙述方法がふれられる箇所にある、「作品に連続性を与えるために」彼が用いた「語り」とは、つまるところ、自伝のそれにほかならない。『文学評伝』では自分自身について語られることを、彼は示唆しているのだ。最後に、コールリッジが「幾つかの目的のなかから」特に挙げるものに関するくだりにも、別の関係性が見て取れる。彼

はこの書物を通じ、「詩の言語の本質に関する長く続いている議論」に決着をつけたい、同時に、その議論の発端となった文書の書き手である、「その詩人の真の「詩的」特質」を明らかにしたいと述べるのだが、そこには彼本人と「その詩人」の関係性が認められる。そして「その詩人」とは、William Wordsworth その人である。それから以上の三つの関係性に、さらに一つ加えるなら、解釈の手掛かりがすべてそろうことになる。それは主に作品の創作事情のうちに探し当てられるもの、すなわちコールリッジといわゆる「声の文化」の関係性である。従来様々な解釈がなされてきたが、『文学評伝』はこれら四種類の関係性に基づき成立している、言い換えれば、それらが作品の様相を決定していると考えられる。そこで本稿では、彼と彼自身の関係性と、彼と「声の文化」の関係性に特に注目することで、この作品を捉え直してみる。といっても、四つの関係性は、各々独立しているのではなく、相互に関連していることは急いで強調されねばならない。またそれらのなかでは、コールリッジとワーズワスの関係性が中心、あるいは基底に位置することも予め指摘しておこう。以上の観点からこの書物を再読するとき、それが著者に対して有していた機能がみえてくる。あわせてその独自性、ひいては文学史における独特の意義も改めて見出されるだろう。

II

これまでの多くの解釈が如実に物語るところだが、『文学評伝』について批評的に語ることは、コールリッジとワーズワスの関係について語ることにほぼ等しい。一読してわかるように、この作品は確かにワーズワス、もしくは彼のテクストに関する言及に満ちている。しかしそれらは単なる話題ではない。コールリッジ、および彼の言説が対抗する対象としてあるのだ。

それが最初に見て取れるのは、先に引用した作品の創作動機が語られる冒頭部分である。コールリッジはワーズワスによる「文書」が引き起こした論争に決着をつけると述べていたが、その「文書」とは、後に第十四章で明される通り、*Lyrical Ballads* 第二版（1800）の "Preface" であった。端的にいえば、『文学評伝』はひとつに、その「序文」への対抗的議論だったのだ。コールリッジは主に二つの点について論駁する。一つは、"the proper diction for poetry"（II：42）に関して、もう一つは、"*There neither is or can be any essential difference between the language of prose and metrical composition*"（II：60）というワーズワスの主張に対してであった。前者の場合、こうした対立がみられる。ワーズワスは、詩の言語とは、"a language taken, with due exceptions, from the mouths of men in real life, a language which actually constitutes the natural conversation of men under the influence of natural feelings"であり、具体的には "*low and rustic* life"（II：42）において見出せるとした。一方コールリッジは、田舎の人々が使う言語より、いわば教育された人々の用いる言語こそ詩に相応しいとし、その理由として、"The best part of human language, properlly so called, is derived from reflection on the acts of the mind itself. It is formed by a voluntary appropriation of fixed symbols to internal acts, to processes and results of imagination, the greater part of

which have no place in the consciousness of uneducated man" (II : 54) と述べるのだ。それから詩の言語と散文の言語のあいだに違いを認めないワーズワスの見解に対しては、彼は、韻律の起源や効果から説き起こし、詩作とは本来 "imitation"、つまり異なる事物の統合化を意味するという指摘を通じて、真向から反対陳述を行う (II : 61-88)。このように、その議論の正確さや公平さには問題が残るものの (Hayden 105-19 ; Bialostosky 912-24)、『文学評伝』が創作された重要な一契機がその「序文」にあったことは疑いない。そして同様の構図は、"imagination" という別の論点の場合にも認められる。ワーズワスは、1815年の *Poems* に付した "Preface" のなかで、「想像力」と "fancy" の働きをほぼ同一視したのだが、コールリッジは、"the imagination, or shaping and modifying power ; the fancy, or the aggregative and associative power" (I : 293) と自ら端的に表現しているように、その差異を強調したのであった。従って以上から、『文学評伝』は確実にその一つの起源をワーズワスによる先行テクストにもつといえるのである。

またコールリッジは、詩人ワーズワスについても幾度となく語る。例えば、"Descriptive Sketches" から *Guilt and Sorrow* に至るその経歴において、ワーズワスの詩的能力は格段の進歩を遂げ、"genius" の域にまで達したという発言 (II : 77-82) にみられるように、コールリッジは彼の「天才」を繰り返し指摘する。第二十章以降で行われる彼の詩作品の批評は、首尾一貫しない文体などの欠点を挙げつつも (II : 120-42)、結局、その想像力の賛美に収斂する (II : 142-56)。そして詩人へのこうした評価は、次の一節に極まる。William Shakespeare や John Milton に匹敵するその秀逸な能力を見抜いたコールリッジは、"What Mr. Wordsworth *will* produce, it is not for me to prophesy : but I could pronounce with the liveliest convictions what he is capable of producing. It is the FIRST GENUINE PHILOSOPHIC POEM" (II : 155-56) と述べるのだ。要するに彼は、ワーズワスの「天才」を確実視する以上に、その偉大な成果を待望するのである (Johnston 341-52 ; Gravil 129-42)。

このようにコールリッジとワーズワスの関係性は、単に『文学評伝』の背景の一部ではなく、そこで展開される議論の画定にまで深く関わるものといえる。その限りで、そもそも彼はその詩人なくしてこの作品に手を染めることはなかったとの解釈も可能である。こうした理解に支えられ、"we find reaction to Wordsworth a major shaping force on the *Biographia*" (229) という Daniel Mark Fogel の指摘があり、またそれに立ち、Jerome Christensen は、この書物でのコールリッジの方法を他者のテクストに対する "marginal exegesis" (*Coleridge's Blessed Machine* 105) とみなし、そして Susan Eilenberg は、彼をそうしたテクストの "parasite" (x) と呼ぶのだ。しかし主張したいのは、こうした二人の関係性を核として他の三種類の関係性が相互に絡むという、『文学評伝』の構造である。そしてそれは作品の内容ばかりか様式も強く支配しているのだ。

III

『文学評伝』の内容にとりわけ大きな影響を及ぼしているのは、コールリッジと彼自身の関係性である。そしてそれは、その表題にも反映されている自伝という「語り」を通じて実現している。ところがこの書物の場合、自伝的性格を論ずるには慎重さを必要とする。

最初に自伝という文学ジャンルそのものを瞥見したい。自伝には明らかに独自の歴史がある。それは、一言でいうと、対他者的言説から対自的言説への移行の歴史である。Saint Augustine による *Confessions* (397-98) に始まるそのジャンルは当初、いわば公的な意義と性格を有していた。つまり自伝記述者は、自らの賛美のためであれ、自己弁護のためであれ、広く実在する他者に向け語っていたのだ。そして彼らの目論見では、自らの言説が、誠実に読まれることを条件に、他者が行う彼らについての理解を思い通りに構築することになっていたのである。こうした外向きの方向性が、ロマン主義時代に入り逆転する。すなわち自伝は内向化し、自らを語る者にとっての自己分析、自己解明のための手段となったのである。具体的には彼らは、己の記憶を辿ることで、過去の自分と現在の自分とのいわば内的な統一性を確認しようとしたのだ。対自的とは、自伝行為が、手段においても目的においても、自己、それも内なる自己に焦点をあてる行為だからである。[1] そしてこの新しい自伝の典型的な例が、ワーズワスによる *The Prelude* である。自らの詩的能力に疑いを覚えた彼は、自身の精神的変化、すなわち詩人としての成長過程を辿り直すことによる自己の時間的統一性を確かめる試みのなかで、そうした不安を払拭しようとしたのだ (Abrams 71-195 ; Mills-Courts 140-202)。

コールリッジの背後には上のような自伝の歴史相がある。それからそもそも彼は、以下に挙げる事実からもわかるように、どちらかというと、己を語る行為に親しむ人間であり続けたのである。まず1797年2月から約一年間、Thomas Poole に宛てて書き送られた、文字通り自伝的書簡がある。[2] それから、結局実現はしなかったが、彼は自らの阿片歴を語る意思を度々述べていた。[3] またそのノートブックにも彼は、少なからずの自伝的記述を残している。なかでも1805年1月11日という日付のある記述は注目に値する。なぜならそれは明らかに、ロマン主義的自伝の一つとみなせるからである。[4] そしてこの系譜は、『文学評伝』へと続くのだ。

それでは彼の自伝的テクスト中最も重要なその作品は、どのような内容であるのか。検討にあたり、作品の構成から考えてみる。『文学評伝』は二巻からなる。そしてこの作品が一般に自伝と呼ばれるのは、主に第一巻に拠る。コールリッジが語る自らの過去とは、特徴的なことに、このように整理することが可能な類のものである。クライスツホスピタルでの学生生活。そこでの James Boyer 師からの詩に関する教え。William Lisle Bowles による詩篇への感銘と、それらが彼の詩の理論化に際し及ぼした影響。初期の詩作。ワーズワスや Robert Southey らとの交際。哲学研究のためのドイツ滞在。1801年から始めた *Morning Post* 誌への寄稿など。要するに第一巻では主に、彼の知的発展、特に詩や詩の批評に関する彼の思索が跡付けられる出来事が語られているのだ (Fruman 214-16 ; Eilenberg 145-46)。そして先に特徴的と述べたのは、コールリッジの自伝的言説は、それら実際に彼に生じた事

柄を語るものでしかないからである。一方第十四章から始まる第二巻は大部分、ワーズワスの詩作品に関するものを中心とした文学批評で占められている。ここでこれまで多くの批評家が取り組んできた問題、つまり第一巻と第二巻の連続性について問うなら、それはやはりこのようになるだろう。「哲学的な章」と呼ばれる個所を含む、第五から第十三章までの議論の展開や分量だけからみても、第一巻でコールリッジが重視するとともに明確にしたかったのは、自身の過去はもとより、それに裏打ちされた、つまり多年に渡る知的遍歴から導き出される「哲学的原理」、とりわけ想像力と空想の差異に関するそれであった。そしてこのように第一巻で打ち立てられた原理が、第二巻での批評の実践に適用されているのだ（Cooke 208-29；Wheeler 121-32；Wallace, *Design* 1-149)。こうした内実を有する作品の構成を踏まえるとき、この自伝が著者に対してもつ機能的役割とはどのようなものといえるか。まず、先述のように、自伝記述では、自らの知的発展に関わる具体的な出来事のみが語られ、従って自己の内面は問題にされないという意味で、対自的言説が存在しない以上、『文学評伝』は、例えばワーズワスの場合のような、著者自身による己の内的探究という目的とは無縁である。そこで次に、本稿冒頭でふれたコールリッジと当時の文学的状況の関係性、つまり自分が非難されることへの彼の嘆き、より正確には、ここ十余年、あまりものを書いていないことを責められ、かつ自身もその点を懸念していたという事情を想起すれば、[5] 彼は、『文学評伝』の創作、発表を通じ、そうした世間の評価に対抗するべく、その空白期間が無意味ではなかったことを証明する、すなわち単なる文人ではなく、確かな素養を備えた文学批評家として自己を確立しようとしたと考えられるのだ。彼は、当今の批評家について、“those worse and more criminal intrusions into the sacredness of private life, which not seldom merit legal rather than literary chastisement”（II：111）といった表現にも読み取れるように、作品というより著者への攻撃に執心する、また恣意的な議論に終始すると断罪する。一方自分はそうした輩とは対極にあると主張したい。そこで第二巻での批評行為、正確にいえば、「哲学的原理から演繹された幾つかの規則の、詩や批評への適用」（I：5）という独自の方法が、正当な文学批評家としての彼を支える（II：107-18)。こうしたことこそが、『文学評伝』の構成が物語る、自伝行為としてのその企ての内実であるのだ。それから、先述のように、ロマン主義的な自伝記述も彼には可能だったことを重んじるなら、この作品での焦点は明らかに意図的に、自己の内的問題性ではなく、文学批評家としての自己の確立、つまり自分と文学的状況の関係性に結ばれていたといえる。また振り返ってそうだったからこそ、そこでの自伝行為は特徴的だったのだ。この作品は、例えば大学時代の様子や軍隊経験、不幸な結婚、阿片歴など、日常的な生活レベルでの個人史や彼の心理に直結する事柄にはほとんどふれない（Mileur ix)。コールリッジは文学批評家という公的な像と無関係な己の過去は排除した、言い換えれば、そうした自己像を結果的に導く過去しか選ばなかったのだ。そしてこの意味で、『文学評伝』は対他者的言説で構成された自伝といえるのである。

以上が、自伝という観点、すなわちコールリッジと彼自身の関係性からみえてくる『文学評伝』の内容上の実相である。またそこでも彼とかの詩人の関係性が色濃く反映していることが見て取れる。まず作品に課せられた機能的役割にあっては、ワーズワスの詩に関する批評のあり方が文学批評家

コールリッジを確かなものにするという点で、その詩人は不可欠な存在であった。それから自伝の種類に関して、『文学評伝』は、対自的言説であった『序曲』と明らかに対抗関係にあるといえる。しかしながらこうした内容上の側面からだけでは作品の十分な捉え直しには至らない。そこで次にその様式に注目するのだが、その際コールリッジと「声の文化」の関係性が密接に関わってくる。

Ⅳ

『文学評伝』の様式上の特徴を明確にするには、1815年春から夏にかけての、その創作場面へと遡らねばならない。この書物は、コールリッジの友人、John Morgan による口述筆記の産物だったのだ（Ashton 297；Holmes 378-79）。主にこの事実が作品の様式を決定している。

分析に先立ち、著者本人が正しく「声の人」であったことは注目に値する。コールリッジは、文学、政治、教育などに関して語る講演者として、ロンドンやブリストルの人々の前に度々立ち、また親しい友人を相手に、様々な話題について、時を忘れ弁舌をふるったのは、学生時代からの、そしてとりわけ1816年、ハイゲイトに居を定めて以降の、よく知られた彼の姿である（Armour and Howes 65-92）。それから口述筆記という創作のあり方も彼には珍しい方法ではなく、『文学評伝』以前では、*The Friend*（1809-10）刊行にあたり、Sara Hutchinson が彼の筆記者を務めていたという（Holmes 153-91）。なおこのような行為の背景には、コールリッジ自身、書くことに対し困難を覚え嫌悪感を抱く一方、話すことにはそうした抵抗はなかったという事情がある。つまりその分彼の思想は、語られることばとなって迸り出たのだ（Armour and Howes 8-36, 146）。そしてここで注視したいのは、彼の発話の特徴である。論を急ぐと、まずそれは、Walter J. Ong の指摘する "oral cultures" の特徴とほぼ一致するのだ。「声の文化」には、例えば、用いられることばには魔術的な力があると信じられていたこと（32）や、語りが "redundant or 'copious'" (39) になるといった特徴があるのだが、[6] なかでも重要なのは、オングが "memory, as it guides the oral poet, often has little to do with strict linear presentation of events in temporal sequence" (147) と述べる、端的にいえば、組織化されないプロットという特徴である。「声の文化」に根差す言語活動は、「そして」という接続詞により文章が次々に繋げられていくという意味での、"additive" (37) という性格を帯び、そのため必然的に語りは全体として "oral episodic plot" (148) をもつことになる。そしてこれは、同時代の人々がしばしば非難をこめつつ指摘する、話し手コールリッジの特徴でもあったのだ。典型的なところで、Thomas Carlyle はこのように述べていた。

> it was talk not flowing anywhither like a river, but spreading everywhither in inextricable currents and regurgitations like a lake or sea ; terribly deficient in definite goal or aim, nay often in logical intelligibility ; *what* you were to believe or do, on any earthly or heavenly thing, obstinately refusing to appear from it. So that, most times, you felt logically lost ;

swamped near to drowning in this tide of ingenious vocables, spreading out boundless as if to submerge the world. (Armour and Howes 115)

あまりにも散漫であるため、論理性も確たる結論もない、それが彼の語りというわけだ。それから William Hazlitt はきわめて率直に、こうしたコールリッジを評して、その心を "*tangential*" (Armour and Howes 255) といってのけた。この「脱線的」とは、組織化されないプロットと多弁が同居する語りに対する侮蔑表現以外のなにものでもない。

そして『文学評伝』に立ち返れば、まず、"longstanding oral mental habits of thinking through one's thoughts aloud encourages dictation" (95) とオングが指摘するように、そもそも口述筆記という形態が「声の文化」に根差すものにほかならず、よってこれだけからも、コールリッジとその文化の関係性がこの作品の成立に密接に関与していることが十分予見できる。そこで作品に分け入ると、「脱線的」といった特徴性が様々なかたちで具現し、ひいては書物全体を性格付けているのが確かめられる。例を挙げよう。まず著者自身の証言から。自分への非難の原因を探りつつも、サウジーの美徳を語って終わった第三章について、続く章の冒頭で彼は、"I have wandered far from the object in view, but as I fancied to myself readers who would respect the feelings that had tempted me from the main road; so I dare calculate on not a few, who will warmly sympathize with them" (I : 69)、と実にあけすけに述べている。また *The Watchman* (1796) 刊行にまつわる苦労やワーズワスとの出会い、そしてドイツ滞在などが語られる第十章は、想像力論を中心とする第十三章に前置された "*an interlude*"、すなわち "*A chapter of digression and anecdotes*" と名付けられているのだ (I : 168)。それから異常なほどに長大な注釈。それは、例えば "idea" という語に関するそれのように (I : 96-98)、あまりにも雄弁かつ多弁であるため、一個の独立した議論と化しているほどだ。そして、あえて列挙するが、自らの過去の物語、哲学的議論、定期刊行物を計画している人々や作家志望の若い人々への忠告、自分への非難に対する抗弁、文学理論、文学批評の実例、次の執筆予定作品の紹介などというように、過度に雑多な作品の内容。そのため作品全体が、それぞれ独自の趣旨をもつ部分部分の単なる連続という印象を醸し出すのは否めない (Spivak 208-26; Wallace, "Besetting Sins" 53)。一方微視的には、「脱線的」様相は節や句のレベルでも確認できる。コールリッジには、ある書物の一節から他の書物の一節へ、それからまた別の一節へという具合に、文字通り点々と議論の焦点を変えることが一度ならずあるのだ (Engell and Bate cxxxi-cxxxii)。[7] そしてこれらの事例が集まり、よく知られた『文学評伝』の性格が出来上がる。まずコールリッジ自身、作品のなかでそれを "so immethodical a miscellany" (I : 88) と呼び、また多くの批評家も、"miscellaneous" (Shawcross lv)、"collage" (Burwick vii)、"zigzaggery" (Perry 101) などと言い表している。これらは、強調するまでもなく、組織化されないプロットという特徴の別称以外のなにものでもないのだ。

それからこの作品の誕生過程も、見方を変えれば、「声の文化」的なものにみえてくる。概略を述べ

れば、最終的に『文学評伝』へと結実するコールリッジの構想自体は、およそ1803年にまで遡ることができるのだが、より直接的な発端は、1815年、詩集 *Sibylline Leaves* の "Preface" として、"the Principles of philosophic and genial criticism relatively to the Fine Arts in general ; but especially to Poetry" を扱う文書の執筆が計画されたことにある。そしてこの企てに発して、二年後、『文学評伝』、すなわち *Biographia Literaria or Biographical Sketches of My Literary Life and Opinions* が生み出されたのだが（Fogel 219-34；Wheeler 8-26)、その過程は、先述した「声の文化」の特徴の一つである、「累加的な」言葉の増殖過程と読めるのだ。典型的な証拠は、最初の印刷人の計算違いにより、あわてて "Satyrane's Letters" や Charles Robert Maturin による *Bertram*（1816）の批評などを原稿に挿入せざるを得なかったという、その創作にまつわる有名な逸話に見出せる（Chambers 278-80)。また作品中の「哲学的な章」も一つの証左となるだろう。その箇所は当初、彼にはさして重要とは思われていなかったが、書き進めるうちに次第に膨れ上がり、結果的には草稿全体の約五割を占めるまでに至ったのだ（Engell and Bate lv)。[8] このように、『文学評伝』は、テクストの内外において、「声の文化」的色合いを強く帯びており、そこにその文化からの影響の深さを改めて確認できるのである。

しかしこう述べたところで、この作品が、純粋な意味において、発話もしくは対話ではないことは明白である。なぜならそれは書かれた文字で構築されているからだ。そこで「声の文化」の特徴を具備しつつ、書かれたものとして在るものといえば、それは書簡であると思われるのだ。Richard W. Armour と Raymond F. Howes は、コールリッジの書簡一般の性格について、"unformed notions, beginnings of thought, considered opinions, puns, anecdotes, carefully wrought images tumble over one another in the eloquent flood"（35）と指摘するが、こうしたその構成要素の雑多性と無秩序さは、組織化されていないこと、つまり正しく「声の文化」の、従って『文学評伝』の特徴と通ずるものである。またコールリッジの散文と書簡が同等であることは、彼の長年の友人 Charles Lamb の慧眼によって既に見抜かれていたことでもあったのだ（Armour and Howes 278)。そして基本的に発話は、現実の人間に向けて現実の人間から発せられるものであること（Ong 101）を考慮すれば、この長大な書簡にも宛名があるはずで、とすればそれはワーズワス以外はまず考えられない。既に幾度も示してきたように、この作品自体、あるいはコールリッジは、様々な局面でかの詩人に対抗していたのだ。従って『文学評伝』は、ワーズワスに宛てられた、いわば公開書簡だったとみなすことができるのである。

そして『文学評伝』をこのように捉えると、以前に言及した幾つかの否定的側面は、逆に妥当性をもってくる。まず自伝記述において、家族や阿片など、きわめて私的な事柄は語られなかったこと、それから作品に散見された「脱線的」な語りの飛躍や不連続性については、読み手は既に実情を知っている、換言すれば、書簡の書き手と読み手が同一のコンテクスト上にあると考えれば納得がいく。そして実際ワーズワスがコールリッジのそうした私生活の様子や思索を知り得る立場にあったことは多言を要すまい。つまりそうした作品の不満足な点は、現実の読み手にとっては、必ずしもそうでは

なかった、むしろ丁寧な叙述は不要だったのだ。そしてついでにいうと、こうしたコミュニケーションにおいてのコンテクストの共有とは、正しく、“communal” という「声の文化」の構造的性格を支えるものなのである（Ong 69）。

またさらにこの作品において、書簡という「声の文化」に根差す表現形式は、より根本的なところで、そこで行われていた自伝行為とも共鳴していたと考えられるのだ。オングによると、まず、「声の文化」に基づく思考、表現とは、“situational”、すなわち抽象的であることを避け、具体的な現実の対象を重視する傾向にあり、そして、こと自己が問題になる場合、そうした傾向がある程度破壊される、すなわち “isolation of the self, around which the entire lived world swirls for each individual person” といった段階にまで至らぬ限り、ことばによる自己の分析や記述は行われ得ない（49-57）。また彼は、書くことにより主体は客体から分離され、いわばそれ自体として対象化される、換言すれば、書くことは、“opening the psyche as never before not only to the external objective world quite distinct from itself but also to the interior self against whom the objective world is set”（105）を可能にすると述べる。とするとこの点、『文学評伝』は、自己にまつわるいわば文化的条件を具現する著しい例といえるのだ。オングの図式に拠るならば、作品においてのコールリッジをめぐる「声の文化」との関係性、そして彼自身との関係性、すなわち作品の様式と内容は、緊密に結び付いていたことが明らかとなる。つまりそこでは、口述筆記に始まり、様々な「脱線的」言説、それから自伝行為が彼に実際に生じた出来事の紹介に終始していたこと、および文学批評家としての自己の確立という目的など、これらすべてが相互に関連しているのだ。また逆の見方をすれば、その点から、『文学評伝』でのコールリッジが自己の内面を問題化しなかったことも説明がつくのである。さらにこうした関連性は、別の読解を導く点でも興味深い。例えば、コールリッジは先の目的のためにあえて口述筆記という創作形態を選んだとか、反対に、そもそもそうした方法を採用したため彼は自己の対象化、ひいてはその内面の考察は果たし得なかったなどと考えられなくもない。しかしいずれにせよ明らかなのはこのこと、すなわち『文学評伝』は、自身をもって、「声の文化」はロマン主義的自伝とは相容れないことを証し立てているのだ。そしてこうした様は、次章で述べるこの作品の独特の性格に通じていくのである。

V

改めてこれまでの分析をまとめると、『文学評伝』は、ワーズワス宛ての、自伝的な公開書簡と捉え直すことができる。また作品に認められた四種類の関係性をすべて考慮すると、そこでのコールリッジの目的はこのようであったといえる。つまり彼は、『文学評伝』を通じ、公の場で、文学批評家として詩人ワーズワスに対峙しようとしたのだ。そしてこのねらいは、“Dejection: An Ode”（1802）に象徴される、およそ1800年以降の彼の有様を十分反映するものである。夫婦仲の悪化やその詩人との離別、止められぬ阿片飲用がもたらす心理的肉体的苦痛なども与って、己の詩的能力の衰退を目の当

たりにした彼の心情が赴いた先が批評家としての自己像だったとしても、それは決して不自然なことではない。[9] そしてそう理解するなら、先にみたワーズワスの「天才」を称える彼の言葉の裏に、劣等感に苛まれるその姿を察知することも可能だろう。ところがそうした目的の背後にある事情は、実際はより複雑であったと思われる。一点だけ述べよう。第二十二章において、ワーズワスの詩の長所と短所を指摘した後、コールリッジは、"I have advanced no opinion either for praise or censure, other than as texts introductory to the reasons which compel me to form it. Above all, I was fully convinced that such a criticism was not only wanted; but that, if executed with adequate ability, it must conduce in no mean degree to Mr. Wordsworth's *reputation*" (II : 158) と述べていた。要するに彼は『文学評伝』に、ワーズワスと彼の詩作品を他の批評家による非難から救出するというねらいももたせていたのであり (Teich 61-70)、そしてその裏側には、自分をかの詩人の庇護者をもって任ずるという、彼のワーズワスに対する一種の優越感も読み取れないではないのだ。このように作品の意図するところには、コールリッジのワーズワスにまつわる容易には分節化されない心理が絡んでいたのである (Christensen, "Genius" 215-31 ; Modiano, "Coleridge and Milton" 150-70)。そしてこうした点からも、この書物では二人の関係性が核として機能していたことが再度確かめられるのであり、これを重視する限りにおいて、先にも指摘したように、ワーズワスなくしてはコールリッジは『文学評伝』を書き得なかった、いやもっと踏み込み、他の批評家とともに、彼のアイデンティティすら存在しなかったといってもよいだろう (Galperin 513-26 ; Modiano, "Coleridge and Wordsworth" 243-56)。

また二人の対抗関係は、より広い視野のうちに捉えると、このようにもみえてくる。その創作形態が示唆するように、コールリッジは、ワーズワスにより書かれたものに、語ることを通じて相対したのであり、従って、『文学評伝』の公表は暗に、「声の文化」によるいわゆる「文字の文化」への対抗、または「語る意識」と「書く意識」の対決でもあったのだ。その点彼の行為は、文化的にも興味深い出来事といえるかもしれない。[10] そしてこうした対立構造を文学史のなかにおくとき、『文学評伝』の独自性が照らし出されてくるのである。まずコールリッジは、あえて前時代の自伝を創作することにより、結果的にロマン主義的自伝に対し早くもアンチテーゼを突き付けたことになる。この作品は1817年、時間的には、ワーズワスの『序曲』(1799, 1805, 1850) と、それと同時代のもう一つの代表的なロマン主義的自伝、Thomas De Quincey による *Confessions of an English Opium-Eater* (1821, 1856)[11] にはさまれるかたちで発表されたことに注目する必要がある。二人の作品は幾度か改訂が試みられた、とはつまり彼らにとり自己の内なる時間的統一性は容易には確かめられなかったという事実に照らすとき (Porter 591-609 ; Arac 57-70)、コールリッジの自伝行為、言い換えれば、対自的言説の拒否という振舞いは、逆説的に、そうしたロマン主義的自伝の成り行きを予見し、先手を打ってそれを回避するものであったかのようにもみえるのだ。そしてより重要なことに、コールリッジは、『文学評伝』に「声の文化」的な要素を多量に盛り込むことで、ロマン主義的自伝を超え、新しい自伝のかたちを創造したといえる。すなわち、内的な自己の表出を拒絶し、公的な自己像を問題にしつつも、

「声の文化」的な言語行為を行うことにより、親密な現にそこに在る対人関係に依拠するという意味での、きわめて私的な自己像を彼は新たに表象し得たのだ。先述の詩人ワーズワスに対峙する文学批評家としての自分という像がそれである。この点『文学評伝』は、対自的性格をもつロマン主義的自伝はもちろん、対他者的性格をもつそれ以前の自伝とも明らかに異なると考えられるのだ。そして強調するまでもなく、作品のこうした独自性を支えていたのが、例の四種類の関係性であった。コールリッジをめぐる、当時の文学的状況の、彼自身の、ワーズワスの、そして「声の文化」の関係性が、これまでにない文学のかたちを指し示していたのである。

注

1 自伝のこうした歴史的変遷については、Weintraub ; Elbaz 参照。特にロマン主義的自伝については、Derrida 97-316 ; Spengemann 62-72 ; Eakin 181-278参照。

2 *Letters* 1 : 302-03, 310-12, 346-48, 352-55, 387-89参照。

3 コールリッジはそうした意向を、書簡を通じてしばしば明らかにしていた。例えば、1808年 9 月、T.G.Street 宛て、1814年 6 月、Josiah Wade 宛て、同年 9 月、Daniel Stuart 宛て、1818年 1 月、J.J.Morgan 宛ての書簡にそれはみられる。各々、*Letters* 3 : 124-26, 511, 529-35, 4 : 795-96参照。

4 マルタ島滞在時に書かれたその記述は以下のようであった。

> It is a most instructive part of my Life the fact, that I have been always preyed on by some Dread, and perhaps all my faulty actions have been the consequence of some Dread or other on my mind/from fear of Pain, or Shame, not from prospect of Pleasure/—So in my childhood & Boyhood the horror of being detected with a sorehead ; afterwards imaginary fears of the having the Itch in my Blood—/then a short-lived Fit of Fears from sex—then horror of DUNS, & a state of struggling with madness from an incapability of hoping that I should be able to marry Mary Evans (and this strange passion of fervent tho' wholly imaginative and imaginary Love uncombinable by my utmost efforts with 〈any regular〉 Hope—/ possibly from deficiency of bodily feeling, of tactual ideas connected with the image) had all the effects of direct Fear, & I have lain for hours together awake at night, groaning & praying—Then came that stormy time/and for a few months America really inspired Hope, & I became an exalted Being—then came Rob. Southey's alienation/my marriage—constant dread in my mind respecting Mrs Coleridge's Temper, &c—and finally stimulants in the fear & prevention of violent Bowel-attacks from mental agitation/then 〈almost epileptic〉 night-horrors in my sleep/& since then every error I have committed, has been the immediate effect of the Dread of these bad most shocking Dreams—any thing to prevent them/ (*Notebooks* 2 : 2398)

注目したいのは、コールリッジはここで自分のこれまでの生涯を時間軸に沿い想起していること、そして、少年時代の「頭痛」の恐怖や「借金取り」、不幸な結婚、それから阿片とそれがもたらす悪夢などへの言及を通じて、「強い不安」という観点から、過去の自分と現在の自分の統合化を試みている、言い換えれば、自己の時間軸上における内的統一性を見出そうとしていることである。こうした点で、この記述はロマン主義的な自伝行為といえるのである。なお自己に関するこのような問題意識は、この頃のコールリッジの心に度々浮上してくるものであった。その点については、

Taylor 357-74参照。

5　この点については、Engell and Bate liii、ならびに Holmes 227-28, 368-78参照。また本文での後の指摘とも関連するが、コールリッジは、1816年7月、John Hookham Frere 宛ての書簡のなかで、『文学評伝』の目的の一つを、"to defend myself (not indeed to my own Conscience ; but) as far as others are concerned, from the often and public denunciation of having wasted my time in idleness—in short, of having done nothing"（*Letters* 4：646）と語っていた。

6　なおこの二点の特徴はコールリッジの会話の特徴でもあったことは、彼と同時代の人々による証言からもうかがえる。それぞれ例えば、Sarah Flower Adams の指摘（Armour and Howes 101）、Thomas Colley Grattan による指摘（Armour and Howes 228-29）を参照。

7　アーマーらによると、『文学評伝』も含むコールリッジの散文作品全体に渡り、話し手としての彼の特徴性を認めることができ、例えばそれは、文体、構造、句、括弧やイタリクス体の多用という点に現れている（29-35）。

8　なおエンゲルとベイトによる『文学評伝』の創作経緯の再構成は、その作品が、予め用意されていた構成に基づき書き進められたというのではなく、著者自身の興味の変化や不測の事態にあわせて、「累加的に」増殖していくように形成されたことを如実に説き明かしている。Engell and Bate xlvi-lxv 参照。

9　1800年以降のコールリッジの様子については、Chambers 133-274参照。

10　なおこうした側面は本来ならば、より慎重な議論を必要とする。というのも、ひとつに、コールリッジは「書かれたもの」である文学作品を対象とする批評家たろうとし、一方ワーズワスは、また詩人コールリッジも同様、「話されたことば」を詩に移植することに腐心した詩人であるからだ。さらにロマン主義のテクスト全体が、「対話的」であることを目指したということも議論を複雑にする。この点については、Macovski 参照。

11　ロマン主義的自伝としての『阿片常用者の告白』については、Miller 32-45, 58-72、ならびに Hayter 118-31参照。

引用文献

Abrams, M.H. *Natural Supernaturalism : Tradition and Revolution in Romantic Literature*. 1971. New York : Norton, 1973.

Arac, Jonathan. *Critical Genealogies : Historical Situations for Postmodern Literary Studies*. 1987. New York : Columbia UP, 1989.

Armour, Richard W., and Raymond F. Howes, eds. *Coleridge the Talker : A Series of Contemporary Descriptions and Comments*. 1940. New York : Johnson Reprint, 1969.

---. Introduction. Armour and Howes 1-98.

Ashton, Rosemary. *The Life of Samuel Taylor Coleridge : A Critical Biography*. Blackwell Critical Biographies. 1986. Oxford : Blackwell, 1997.

Bialostosky, Don H. "Coleridge's Interpretation of Wordsworth's Preface to *Lyrical Ballads*." *PMLA* 93 (1978)：912-24.

Burwick, Frederick, ed. *Coleridge's* Biographia Literaria : *Text and Meaning*. Columbus : Ohio State UP, 1989.

---. Introduction. Burwick vii-xix.

Chambers, E. K. *Samuel Taylor Coleridge : A Biographical Study*. Oxford : Clarendon P, 1938.

Christensen, Jerome. *Coleridge's Blessed Machine of Language*. Ithaca : Cornell UP, 1981.

---. "The Genius in the *Biographia Literaria*." *Studies in Romanticism* 17 (1978)：215-31.

Coleridge, Samuel Taylor. *Biographia Literaria or Biographical Sketches of my Literary Life and Opinions*. Ed. James Engell and Walter Jackson Bate. 1983. The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge 7.

Princeton: Princeton UP, 1984.

---. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Earl Leslie Griggs. 6 vols. Oxford: Clarendon P, 1956-71.

---. *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Kathleen Coburn. Vol. 2. Text. London: Routledge, 1962.

Cooke, M. G. "Quisque Sui Faber: Coleridge in the *Biographia Literaria*." *Philological Quarterly* 50 (1971): 208-29.

Derrida, Jacques. *Of Grammatology*. Trans. Gayatri Chakravorty Spivak. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1976.

Eakin, Paul John. *Fictions in Autobiography: Studies in the Art of Self-Invention*. 1985. Princeton: Princeton UP, 1988.

Eilenberg, Susan. *Strange Power of Speech: Wordsworth, Coleridge, and Literary Possession*. New York: Oxford UP, 1992.

Elbaz, Robert. *The Changing Nature of the Self: A Critical Study of the Autobiographic Discourse*. Iowa City: U of Iowa P, 1987.

Engell, James and Walter Jackson Bate. Editors' Introduction. *Biographia Literaria or Biographical Sketches of my Literary Life and Opinions*. By Samuel Taylor Coleridge. Ed. James Engell and Walter Jackson Bate. 1983. The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge 7. Princeton: Princeton UP, 1984. xli-cxxxvi.

Fogel, Daniel Mark. "A Compositional History of the *Biographia Literaria*." *Studies in Bibliography* 30 (1977): 219-34.

Fruman, Norman. *Coleridge, The Damaged Archangel*. New York: George Braziller, 1971.

Galperin, William H. "'Desynonymizing' the Self in Wordsworth and Coleridge." *Studies in Romanticism* 26 (1987): 513-26.

Gravil, Richard. "Imagining Wordsworth: 1797—1807—1817." *Coleridge's Imagination: Essays in Memory of Pete Laver*. Ed. Richard Gravil, Lucy Newlyn and Nicholas Roe. Cambridge: Cambridge UP, 1985. 129-42.

Hayden, John O. "Coleridge, the Reviewers, and Wordsworth." *Studies in Philology* 68 (1971): 105-19.

Hayter, Alethea. *Opium and the Romantic Imagination*. 1968. Berkeley: U of California P, 1970.

Holmes, Richard. *Coleridge: Darker Reflections*. 1998. London: Flamingo, 1999.

Johnston, Kenneth R. *Wordsworth and* The Recluse. New Haven: Yale UP, 1984.

Macovski, Michael. *Dialogue and Literature: Apostrophe, Auditors, and the Collapse of Romantic Discourse*. New York: Oxford UP, 1994.

Mileur, Jean-Pierre. *Vision and Revision: Coleridge's Art of Immanence*. Berkeley: U of California P, 1982.

Miller, J. Hillis. *The Disappearance of God: Five Nineteenth-Century Writers*. Cambridge: Harvard UP, 1963.

Mills-Courts, Karen. *Poetry as Epitaph: Representation and Poetic Language*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1990.

Modiano, Raimonda. "Coleridge and Milton: The Case against Wordsworth in the *Biographia Literaria*." Burwick 150-70.

---. "Coleridge and Wordsworth: The Ethics of Gift Exchange and Literary Ownership." *Coleridge's Theory of Imagination Today*. Ed. Christine Gallant. Georgia State Literary Studies 4. New York: AMS, 1989.

Ong, Walter J. *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. New Accents. 1982. London: Methuen, 1984.

Perry, Seamus. *Coleridge and the Uses of Division*. Oxford: Clarendon P, 1999.

Porter, Roger S. "The Demon Past: De Quincey and the Autobiographer's Dilemma." *Studies in English Literature 1800-1900* 20 (1980): 591-609.

Shawcross, J. Introduction. *Biographia Literaria*. By Samuel Taylor Coleridge. Ed. J. Shawcross. Vol. 1. Oxford: Clarendon P, 1907. 2 vols. xi-lxxxix.

Spivak, Gayatri Chakravorty. "The Letter as Cutting Edge." *Yale French Studies* 55/56 (1977): 208-26.

Spengemann, William C. *The Forms of Autobiography: Episodes in the History of a Literary Genre*. New Haven: Yale UP, 1980.

Taylor, Anya. "Coleridge on Persons in Dialogue." *MLQ* 50 (1989): 357-74.

Teich, Nathaniel. "Coleridge's *Biographia* and the Contemporary Controversy about Style." *The Wordsworth Circle* 3 (1972): 61-70.

Wallace, Catherine Miles. "The Besetting Sins of Coleridge's Prose." Burwick 47-61.

---. *The Design of* Biographia Literaria. London: George Allen and Unwin, 1983.

Weintraub, Karl Joachim. *The Value of the Individual: Self and Circumstance in Autobiography*. 1978. Chicago: The U of Chicago P, 1982.

Wheeler, Kathleen M. *Sources, Processes and Methods in Coleridge's* Biographia Literaria. Cambridge: Cambridge UP, 1980.